東海紀行

松平春嶽　著
堀井雅弘校訂

凡例

一東海紀行は、福井藩主松平春嶽（慶永）が執筆した天保一五年（一八四四、一二月に弘化と改元）四月二九日から五月一一日にかけての参勤交代の紀行文である。本書は校正用の草稿にあたり、原文に修正や訂正、加筆などが朱書きされている。

一本書は、福井県立図書館で保管されている松平文庫「東海紀行」を底本とし、福井市春嶽公記念文庫「天保甲辰東海紀行」、および同「東海道駅路紀行草稿」を校合本とした。

一漢字は、常用漢字に改めた。また、変体仮名は、左記の三文字をのぞき、平仮名に改めた。

ゟ（より）　而（て）　江（え）

一校訂にあたって、文中に読点、並列点を加えた。

一朱書きのうち、取り消し点、および取り消し記号は、原文の左傍に「〻」をつけた。修正・訂正・加筆などの文字は、資料にしたがって、原文の右傍（一部は左傍）に記した。

一改行、および欠字・平出は、資料にしたがった。

一校訂者の注記は、（　）で示した。

一本書の成立や位置づけについては、本紀要収載の「松平春嶽の紀行文『東海紀行』」を参照されたい。

（表紙）「東海紀行」

（序文）甲辰東海紀行序

去年は立かへりの御暇ニて、越の国へ行けれハ、ことし春の初、雪中に打立て、江戸へ参きん し侍る、なほ国のまつりこともいたしのこりこれ有ハ、たんを公に申たつしけれは、御ゆるしありて、又国へ相たち候事は、全く公の御恵ミの深き、いとありかたかりける、無程発途せんとしける内に、筑山先生[1]、当年は道の記かきて見せよとありしゆへ、愚文鈍筆を恥すしてかきとめぬ、さためて間違も多く有んと思ふ、先生につきて正を乞ふにこそ

皐月　春嶽

（本文）甲辰東海紀行

天保甲辰四月廿九日

きのへたつのとし卯月廿九日発途すとて、田一位君[2]より竹中半十郎[3]（ママ）を御使にて御ミたてに

下されし、御親切の御事申もおろかなり、且ハ長途を
御案しあること、身にあまり難有かりき、いそき逢て
御返答申上ぬ、又大母の御方松栄君4)よりも御使下され、
是も御返答申上謝し奉る、それより野装束になり
て奥へも目見申付ぬ、其中の年寄磯岡5)と云に申置
候事ハ、一位尊君ハ御丈夫とハ申なから、御老年にも
ならせられ候へハ、万々一御病も出来候ハ、、とく国本へ申遣
すへし、かけつけ御かん病も申上たく候間、ふくミおる様
に、このこと寸分にても尊君へきこへあけてハよろ
しからす、しかし御内実の御病気ハしれかぬるゆへ、内
分ハおれゐの方6)へも申入候ゆへ、このかたより御文まゐり
たらは其心得すへしと云、それより表へ参り、留守の家
老酒井知安7)・用人中根師質8)・雨森貞照9)・水谷勝房10)・笹治
高典11)等に暇乞して、長鮑を遣ハして祝遣しけ
り、もはや五時となりたれは、供もよろしく、発途いた
し候やうに高典申きけて先たつ、稽古所にハ広式
用人・医師なと見たてに罷り出つ、時計之間を経て表小

姓部屋前に表医師共いつる、又長ろ之間ニも左諸士・
無息、右出入之士・商人居り、広間ニハ士居り、何も辞をかけぬ、
竹中こ、まて見たていたしぬ、すなハち馬に打乗りて
発途す、白洲にハ出入町人之軽き者共出たり、表門より間
部詮勝守12)之邸松平正名筑後守13)之亭前へか、り、このにて
天方友益孫八14)、馬名笹森・渋谷宣清権左衛門15)、・雨森興貴太郎兵衛16)・出淵成
親伝之丞17)、宮尾・山形好和熊之助18)等馬に乗りて供奉す、常盤橋御門
より河岸通り、比丘尼橋左之本通り、尾張町の所にて森
忠徳越中守19)と出合ひ、たかひに会釈す、案するに、忠徳之邑は播
州の赤穂なり、日光へ詣て、東山道を帰らる、なるへし、夫より
竹川町通り、芝新橋を渡りて、源介町神明町を経て金杉
橋通り、此へんにて三縁山之門見ゆ、馬上にて拝伏いたし、こ、を
離れて高縄通り、右泉岳寺、これは浅野家の義士の墓あり、
委しき事は義人録に詳か也、又少しまいれは、右之方に
東海寺といふ寺あり、沢庵和尚之開基也、沢庵ハ知識
の僧なり、知識になるも一通りの工夫にて参る事にあらし、
雨に浴し、風に櫛り、日夜心を用ひにしより、終に一山の開
基にて、其名海内にあまねく尊とまれし、況や正道を学

もの日夜聖賢に至るの工夫すへきになん、恐なから
大神君にハ、千辛万苦し給ひ、日夜神慮を労せら
れ、自然と聖賢の道に御叶ひ被遊しゆへ、終に徳川
天下の御開基とハなり給ふ、沢庵ハ出家にて尊ふ斗なり、
大神君ハ、千万年の後までも御徳海内にあまねく、万民
余沢を蒙らぬハなかるへし、この東海寺前を過て海上
を眺望すれは、上下の総州の山見ゆる、よきけしき也、品川
駅より川崎へ二里半也、無程盤井之神社となる俗に鈴ノ森、八幡と云
宮随分結構[22]なり、此所に小休す、後ろの方を見れは、農夫
の一人ハ真中にあり、両人は左右にありて荒起するなり、
富める者ハ馬或は牛なとにて、耕し貧きものハ如此し
となん、唐の李紳か汗滴禾下土といひしを思ひ出にし、
夫飽食暖衣逸居無教近禽獣と孟子に見へたり、
今世の諸侯、治世に生れ、婦女の手に長し、逸楽にのミ
居りて、下情に通せす、百姓の艱苦をしらぬハ嘆かハしき
こと也、とりけたものにも近しとハいへ、犬ハ賊を知らせ、猫は
送迎を知る、されハ逸居して礼義を知らぬ者ハ、犬猫にも
おとるといふへし、これまて馬上、この所より駕にて行、不入
斗村・八幡村を過れハ、無程大森となる、此所の産とて麦ハら
にて作りし小童の玩器を売る、程なく六郷川となる、浅井政昭[23]
出迎ふ、政昭ハ近習なれとも仮水主頭つとむ、水ハ平水也と云、渡船
す、川崎宿に至る四時半頃、田中兵庫出迎ふ、これか所に昼休す、
反町直徳[24]・森敬慎[25]ハ田第より御附ニて、此度ハ残るゆへ、此所
にて暇乞す、昼休済てこれより歩行し、八丁なハてへかゝる、
鶴見橋也、この所よねまんちう名物也、生麦村を終て、金川ち
かくなりて、あやしけなる寺あり、帰国山観福寺といふ、浦嶋太
郎か作し寺といふ、帰国之号ハ、龍宮より日本へ帰りたれは
かくいふとそ、観福とは、龍宮にて福を見るゆへとかや、けにか様
の事ありしにや、浦嶋法名を浦嶋院蓮西正復大居士と云
天長二年より正徳三年迄八百年余に及とかや、前を通りて
金川駅とす、本陣鈴木源太左衛門小休也、庭より海上上下
総の山見ゆ、右金本牧見ゆ、絶景也、この所より駕にて行き、間も
なく程ヶ谷駅となる、此所本陣刈部清兵衛此所に宿す
八時半二寸五歩、江戸より此駅ニ至る、凡八里八町とそ

晦日

七半時之供揃ニて発程して、あいたなく武州と相州之境

あり、此所は夜の内とをりし故分らす、矢宿と信濃坂との
間ニて挑灯引、このあたりにて不二山いさゝか見ゆ、戸塚宿に
小休す、本陣ハ沢辺九郎右衛門也、こゝを立て藤沢駅となる、
この所に、清浄光寺とて、一遍と云僧の開基也、俗遊行寺と云、此
寺より使僧あり、供頭披露す、この寺に色々宝物ありと云、
本陣蒔田源左衛門に小休す、こゝを立て、駕廻り桑山泰貫[26]に
彦助小姓役申付て、道よき所を考へよ歩行せんとて歩行しぬ、所の名を
きけハ、四ッ谷之邑と村人答ふ、又右に白旗明神の社あり、駅路
記に詳也、間もなく南郷村松屋之舎に小休す清左衛門、これ迄歩
行、又こゝを歩行ニて立ちし、右大鳥井有て、鶴峯山と書
たる額あり、八幡の社の神をいつき祭るとかや、やかて馬入川となり、政昭出
迎ふ事如前、云平水より一尺程高しと、平塚宿通りの駅をぬけ、伊
達宗孝和泉守[27]之宿れり泊也、又こゝを行は花水橋なり、此所ハ鎌倉之
時分代に ハはんくわの地也、今江戸の両国橋の様ならん、鎌倉家
の衰微は北條之氏外姻をもて権を専らにせしより起れり執権あしかりけれハなり、奸人を用ひて
国の乱るゝ事を引出す、恐るへき事也、殷監とも云つへし、無程大磯之昼
休につく、本陣小嶋才三郎也の家に昼休す、此所へ菅沼真次平兵衛[28]到着す、
真次、留守の警衛のために下りし、予か出立前に江府江つく
へきを、大井・酒匂の川等とまりて余儀なくおくれしなり、此所にて
目見さす、小宮山清慎周蔵[29]の老父、長病重りたりと告たる由、
清慎腹痛のよし云て引く、此所を立て左に鴫立沢あ
り、前に小さき池あり、これ昔の鴫立沢と云伝ふ、こゝに
小橋あり、渡りて小さき木戸門あり、内へ入れは左にとらの
像あり、前に西行の像もあり、これは僧文覚か作しとそ、
この所を過て松原にかゝる、乗馬して行、一里程行は雨
少つゝ降、皆すゝめしゆへ、駕上にて梅沢村に至る、大友屋
半四郎の所に小休す、にハかに暴雨大雷す、天方友益・
渋谷宣清両人参りて安否を伺ふて、暫く話をす、予の
性、雷を嫌ふて甚畏縮しぬ、近藤信敏[30]・栃屋高英[31]・上月
景泰[32]等に諫られぬ、実に残念なること也、昔後光明帝
は雷を忌ませ給ひしか、或時、雷鳴けれは紫宸殿の階上
に御一人立せ給ひけり、かゝる事度々なりけれは、後にハ忌ませ
給ふ事なかりきと云伝ふ、予もふんはつして、今よりハ雷を厭
ハしと思ふなり、追々晴るゝゆへこの小休をたちてゆけは、酒
匂川となる、この川輦台ニて越す、政昭出迎ふ事例の如
し、平水よりは一尺程高しとそ、予こしたて惣勢も越す、

また松原を行けは国府津なり、こゝニては植付もすミたり、
この所にて二條在番井上正健33)ニ行合ぬ、こゝを過れは
小田原駅なり、こゝは大久保忠愨34)之城下也、脇本陣
清水金左衛門之舎泊る、いつもハ久保田甚四郎之家にとま
れとも、松平慶親君35)のとまりゆへ、この家にとまる、切六時へ
壱寸五歩前、食なと喰ひて、間なく寝所にいる、当時の諸
侯参勤往来すといへとも何一ツ不自由なることなきハ、治世
の有かたきそのかミ
東照宮ニは此小田原の御征伐北條氏直也、御旅中の御不自
由敵国の御気つかひ思ひやり奉る、今予か道中なと心を
安し居るにつけても、宗祖之御恩沢をわするへからす、
程ヶ谷駅ゟ此駅まて、凡十二里半となん

五月朔日

小田原を六時二寸五歩に発途し、それゟ風祭り・入生田を経て、
山崎と云所に金湯山早雲寺と云寺あり、北條早雲の開基にて、人皇百六代後奈良院の勅願寺也、早雲
よりの三代之廟所あり、門前に下馬札あり、又こゝを
経てゆけは湯本也、右放光堂と書る額あり、間なく伊豆
屋定右衛門なる舎に小休す、湯本細工とて、無益の玩器
をうる、又こゝを立てより歩行にてゆけは、曽我五郎鑓
ためしの石とて往還の傍にあり、真偽を尋ねすして五郎
か志を見るへし、又ゆけは須雲川といふ所ニ参りたるに、向ふ
の山に右の方に小滝あり、名を忍ひか滝と云、其よしハ、山の
半腹より落て又半腹に入と云よりして名つくるとそ、これより
行けは畑なり、小休は茗荷屋畑右衛門なり、此所にも又無益
なる玩物あり、珍玩奇巧の喪国斧斤珠玉金繡実迷心
之鴆毒を伝にも見へ侍る、是は其類まてにハあらねと、此畑へ
到着之時に小児の書を読て居たりき、聖人の御辞に蛮狛
の国といへとも忠信篤敬ならては行ハれしと述給へり、かゝる
山中にても太平の余沢あまねくて書を読ことを知りぬる
こそ、いとやさし、こゝを立てゆけは権現坂となる、右に二子山
見ゆ、魔所とて登らぬ事と申伝ふれと、それに上りて眺望
すれは小田原の城を眼下に見くたす故、要害の為かく申
せしなるへし、決して魔所といふハ偽りならん、これゟ箱根権現
鳥井あり、上坂広満藤大夫供頭36)云、本道より御出可被成哉これより
御出なさるへくや、これより御いりなされ候は脇道にて近く本道ハ

遠く御座候本道より参るにしくハなしといへとも、供奉の面々の疲労も案すれハ、不本意なから、これゟ行んとこれゟ歩行し鳥井を入れは、小童五六人出きてしきりに案内せんと申す、侍臣に尋れは、すきハひに案内していさゝかのちん銭をとると云、左に湖水見ゆ、元箱根を経てゆけは、又松原となる、鳥井有、又行けは曽我社あり、左に別当金剛王院と云あり、大きなる構なり、石段を上れは門あり、堂中に入れは絵馬多くかけたり、内陣に入て拝す、この権現は中彦火々出見尊、右木花之佐久夜姫、左瓊々杵尊なり、人皇四十六代孝謙天皇の時、天平宝字年中の造営にて社領二百石とそ、宝物ハ取にたらす中にも五郎十郎か刀あり、赤木の短刀あり、今二人の事を思ふに、凛々として生気ありともいふへし、又わか家の二代西岸公の寄附なされたる大刀存す、長さ三尺余にて、こしらへ頗る結構也、余ハ宝物記に委し、又こゝを出て曽我堂に参る、則両人の霊を祭るなり、石階を下る、古釜あり、頼朝不二の牧狩の時用られし釜と云、其銘を鼻紙[37]にすらせぬ、又湖水の傍を行、松波正誠[38]云、六月日に湖水を船にて膳を進ることありとそ、これゟさいのかハらの側を通る、日

蓮坊主、釈迦の像なとを刻ミて坊主念仏し、鐘をたゝく、それより関所なり、過て箱根の本陣也、天野平左衛門と云昼遣すみて、国許の飛脚つきぬ、此駅へ立寄て用事承り、江戸表へゆくつもり也、すなハち一位君并母氏へも直書出しぬ、清慎の父常春、物故しぬれハ、其定りの服忌かけぬへくとなん、前波幸信[39]申出ぬ、こゝをたちて、箱根宿離れてあるきて行けは、伊豆相模の境なり、山中宗閑寺に小休す、これまて歩行す、当寺ハ浄土宗也、程々の贈り物す、内に入左之方に一柳監物の廟あり、この所にて討死せし人也、駕にて行、下坂なり、右に富士山見ゆ、間なく笹原見晴屋吉左衛門に小休す、又かと屋とも云、この家より豆州の山見ゆ、けしきよき所ゆへ、ミはる屋と云とそ、この笹原村の右に石塔あり、一柳氏の廟所にて一柳庵と云とそ、これより駕にて三島駅にいたる、右に三嶋明神あり、本陣世古六大夫に館しぬ、切六時の過なり、小田原より此駅にいたる道程、凡八里ニ及ふとそ

二日

三嶋駅六時発駕しぬ、豆州駿州之境に千貫樋と云

所ありて、昔伊豆の水を駿州江とるとて、昔銭千貫を以料に
せりとそ、紀行之書に委しきよし、予いまたしらす、加賀成
昂九郎右衛門40)の言に依て初てしる故、こゝに記す、又右に不二山見ゆ
沼津の城下をすく、領主ハ水野忠武出羽守41)也、城下ゆへ駕
にてゆく、本陣間宮喜右衛門に小休す、城下はなれて歩行
す、柏原立円寺俗に七面堂とそに小休す、庭より富士峯・浮嶋か原
を望む、絶景也、駕にてたちて元吉原を経る、此間暫時之
所に富士を左に見る所あり、吉原宿駅にて昼遣の餉開く、本陣神尾
六左衛門と云、庭上ゟ見れハ富士を正面に見る、或ハくもり
或ハ晴て全くハ見へす、こゝを駕にて出たつ、酒井忠学雅楽頭姫路42)・
柳沢保興甲斐守43)に出合ひ、時宜合いたしぬ、不二川に到る、政昭
例の如し云有て、平水より三尺たらす高きよし、此川ハ急流に
して、船ふち高くひハ〳〵としたる船の製様なり、上下一同に無難に
越立ぬ、岩淵村斎藤縫殿左衛門に小休す、この庭中ゟ富
士峯向ふに見ゆ、こゝを立出つ、此辺数多幟あり、此村にくりの
こもち売る、名産也、栗のこを臼にてひく、童女五六人打寄
て哥をうたふ、歌の詞わきまふへからす、昔もろこし周の時、国々
の流行哥を献せしめ、其国々の風俗の善悪を見しとそ、

今伝る所の毛詩是なるよし、今此歌の詞わきまへ得され
は風の正風変れもしりかたし、友益・宣清云、この所、以前は
街道の向ひなりし、今こゝに附替したりとそ、申牌に蒲原へ七時
二寸五歩ニつきぬ、三嶋より此駅ニ至る、凡九里ニ及とそ

三日

蒲原初原とを六時に駕発して立て、町屋原と云所にて松平
定穀隠岐守、伊予松山44)に出合ぬ、西倉沢川嶋勘兵衛家に小休す、此所
之景色よろしきなれとも、富士くもりて見へされハやみぬ、
歩行して磐城山にかゝる一名、薩埵嶺と云、薩埵嶺之説は、
臣家成昂か文あれは是に譲りぬ、磐城山を越て興津川、
水多けれハ輦台にて越渡す、けふは水少なし、所土地の奔走
として、かり橋かけたり、興津宿駅を過て右之方巨鰲山求
王院清見寺なり、此寺ハ旧名たかき寺也、こゝへたちよりて見ん
とて、裏門より玄関へかゝり、座敷へ通れハ、又向ふにハなれ座敷亭
あり、　大神君の真筆、豊秀吉臣太閤君の書状、足利尊
氏筆卿の観音世等あり、其外霊宝数品之内ある に、珍
しきハ、平相国清盛の仏龕の扉を、楠氏正成
見台にいたされし、武田家に持伝へて宝器なりしか、

晴信（信玄）此寺に寄附せらるゝとそ、見おハりて、住侍（僧）案内
し行、なけしに突棒・さす股等の物掛（設置）ありしを尋ぬ
れは、むかし此所に関所ありし（所謂清見か関、古名勝也）、其あと当寺と
ハなりぬ、この時分の道具也と申伝ふと云へり、又廊下尓
かゝれは麁末なる輿一つあり、　これハ神君当山の
再興大輝長老の法問を御聞被遊（しめせし）候節、疾風暴雨
しけれハ、上意に、今日之帰寺難儀たるへし、駕にて帰るへしと
仰ありて、此御駕下されて帰寺せしとそ（制輿の如くにて左右に窓あり、前片扉也、色しゆんけいなり）、それに駕して
其後に宰臣定信、寺僧に命し、此御駕麁末に取あつかふへからすと、いよ〳〵大切にいたすと云、拝見終て本堂の前にいたれは
大なる額を懸たり、永世孝享の四字を戴たり、尋ぬる
に、琉球之世子東都に来聘の時、道中にて卒す、此
寺に葬りし、今に山上に其墓所ありとそ、其後寛政年中
年忌に当りし故、琉人出て吊し、この額を認めたり、今
に江戸江来聘して、帰途、蒲原駅にて祭文を認め、当寺
へ捧くとそ、本堂のわきに尊氏（将軍）の像あり、高武蔵守師直
寄進也とそ、その眼中甚するとし、又本堂金位牌あり、
これ石田三成を召捕し田中伝左衛門之位牌也、伝左衛門
其父母と一所に並へのせたり、裏に銘文あり、初め忘れたり、
末に為仕官住二越前国一矣とあり、予の臣下にある田中伝
左衛門か家也、誠にうれしくも（奇異の事なり）存する也、玄関の下れハ前に
鐘楼あり、上りて見れは古鐘也、銘正和年中之由、こゝを（間に鋳せし古鐘なり、）
下りて此所より雨ふり出す、駕上に而江尻に到る、本陣寺尾
与右衛門小休す、これ今ひらかいち村を過て小吉田村稲葉屋
源右衛門に小休す（名物）、又こゝを駕にて出立、府中に到る、此間
一里也、むかし今川家代々の居城也、今川家滅ひて後、天正
十四年　神君浜松今当城に移らせ給ふ、この御城は
神君薨御し給ふて後、大納言忠長（二代将軍秀忠三男）卿へ進せらる、御自盡の後
御番城となるとそ、弥勒茶屋之内亀屋万助之舎に小休す、
此所にも玩器をあきなふ、こゝに奇器あり、富士の形なる石あり、
阿部川原より出ると云、名つけ富士石と云とそ、同も玩器なりと
いへとも、湯本細工ハ猶用に立事も有へし、富士石ハことに無益
のもの也、是より阿部川あり、水主頭政昭出向ふこと如例、川
水三尺ほと高しと申す、上下とも無滞わたしぬ、この川をこして
手越村迄歩行す、間もなく丸子なり、此所名物（土地の）とろゝ汁
あきなふ、まつすく（直路）に行ハ柴屋寺といへる廃寺なり、左へゆけは
街道也、柴屋寺ハ宗長といへる俳人（連歌に名を得し者の）の古跡と云取にたらす、山を

兎月峯と云とそ、是を過て宇都の谷坂となり、此所にて十団子
といへるうれり、疱瘡のましないなりと云、此所の石川忠左衛門
に小休す、こゝに大切なる岩あり、豊太閤之羽織・
神君之御茶碗あり、昨年拝見したるゆへ、ミす、こゝを立て
岡部駅也、本陣増田与三郎に館す、蒲原駅より
此ニ到、十一里十町ニ及とそ

四日

六時の供揃にて出たつす、藤枝宿に到る、左之方田中城主
本多正寛（豊前守也45）なり、こゝハ城下にはあらねと、城下のあたりゆへ
駕上す、本陣青嶋次右衛門に小憩す、次の駅を嶋田
とす、置塩藤四郎の本陣に午休す、こゝを立て大井
河に向ふ、急流にて、かつ海道第一の大河也、俗に此河と
箱根嶺とさして海道第一之難所いへり、政昭出迎ふる事
例の如し、且当駅に祭る所の大井大明神の札守をさゝ
くる、是ハ渡川安全之守なりと申て、宿人より例の如く出せ
しとそ、さて上下無恙打わたしぬ、この川駿遠の境なり、
金谷駅に小休す、本陣を佐塚左次右衛門と云とそ、又こゝを
駕にて立、暫ゆきて歩行す、金谷坂をこへ、菊川に到る、矢根
鍛冶師五條清次郎藤原忠来なる者、道の傍に出て拝謁
す、掛川駅にて田川綏（清介46）を以其由緒を問しむ、其先祖まさ
のりと申者、清和天皇御宇に京都五条通りに住居て矢根
鍛冶仕しか、其後子孫当村に引移り居りて、
神君関原の御陣に矢根を献上仕しに、終に御勝利ありて
御凱陣之節、御奉書頂戴仕し、それより尾張殿へも御当
家へも献上仕来り之御答申とそ、小夜の中山にかゝる、名物の
なりとて飴のもちをうる、店々に婦女たてりて、あめのもち
めされと呼ハりぬ、こゝを過て夜鳴石といへるあり、怪説伝ふ
るにたらす、新坂宿となる、宗伝寺に小休す、夫より掛川
宿とす、本陣ノ沢野弥三右衛門に館す、名物葛布を
鬻く、大井河渡りし安否ハ江戸へも国本へも申遣す事
にて、けふの泊へ東北の飛脚立寄て行事、旧例也、扨東
ゟ来れる飛脚ニて、　養性尊公　松栄尊君の御無事之
たん、それ〳〵ゟ申来りて悦ハし、北より来れる飛脚ニつけて、
両尊君并おれゐの方へ書翰差出せり、岡部駅より
此宿に到る、凡八里三十四町に及とそ

端午

六時に掛川を出立、尤駕也、間もなく、袋井の本陣田代
次郎右衛門に小休す、又立出て、駕の中にて宰臣・御預所・
勘定奉行・監察等の用状を見居たる内、不覚見
附となる、本陣鈴木孫兵衛に昼遣し、それゟ又駕にて
ゆく、この宿の内右之方に天竜川までのすく道ありて、一里
ほとも近しとなん、しかるにすく道行し人よりハ、予か本道を
行しよりハさきになりたり、これハ、本道ハ道よくて、すく道
ハすへりてあしかりけるゆへとそ、凡君命を受て旅行する者な
と本道行て病気かつ事故のありし時、所々の役人なと
取あつかいに心配もいたす也、なましいに近道して事の出来
なは、いかゝすへきや、しかし余儀なきふし、もしくハいそきゆ
くへき事あらハ、此限にもあらしや、池田村市川伊平次なる
舎に小休す、これより天竜川也、大小天竜あり、先小天竜を
わたりて大天竜に到る、むかし本多忠勝の忠勇も思ひ
出られたり、政昭出向ふ、云、こゝハ平水也とそ、陸に上りて浜
松の郊外まて歩行す、これゟ駕にて泊へつく、本陣伊藤
平左衛門也八時頃、此辺にサイカガケと云所ハ　神君味方か
原にて御難戦ありし時、打死の人々の墓ありと聞しゆへ、今日
ハ着も早けれは、これゟ参るへくと渋谷宣清に申す、宣清
雨森興貴に伝ふ、興貴今日は御つきも早く候へは、御供の
人々疲れをやすめて明日の御供を心あてに仕り居り候ハん、
しかれハ入せられす候かしかるへくやと申ニ付止ぬ、又宇布見
村の中村　源左衛門（ママ）もけふの御つき早けれは、今日にも御入をと
願ふ、又水野侯よりも馳走出申候と云、里数を尋れは、当所
よりハ二里半、往来にて五里也、篠原ゟゆけは一里とあれハ、
かたく監察の議もある故、今日ゆかすしてやミぬ、扨中村
源左衛門並に五六人同姓の者出て、古酢を献上す、この由
緒ハ、　黄門浄光公（結城秀康）御母公長松君、　浄光公を産給ひし
せつ、石を焼きて、上に酢をかけて、きかせ奉りし古例を以て
なりとそ、当駅本陣伊藤平左衛門ハ、其時御伽せし例を以て
赤飯を献上給しぬ、又うなきを献したれハ、庭の池に放したり、
此所城ハ駅の右の方にあり、掛川より此宿に到、凡八里八丁

六日

暁七時之供揃にて、駕上いて出立つ、篠原村万松院
に小憩し、こゝより歩行し、五六町ほと行て右に細道あり、
則宇布見道也、これより都呂村を経て宇布見也、宇布

見ハ惣名にして七村に分る、小名小山・領家・浅羽・西ヶ崎・田畑・長保寺・中村と云、家数七百軒斗也、源左衛門ハ領家に住す、小山を通り抜て領家也、源左衛門か舎にいたる、由緒ハ後風土記（三河等の記録に載た）諸書に審なり、我祖先　黄門秀康公は天正二甲戌二月八日にこの源左衛門か宅にて生れさせ給ふ、御母堂お万之方（中村氏申伝へにハお松のかたと云、暫こゝにとめて備後考に備ふ）といふ、故有てこの民間にて生れさせ給ふ、御胞衣塚今にあり、塚の上に梅あり、脇に小松生ひ出る、予一度この家に立よらん事をねかひしに、ことし（今日）ハ折を得て来りし事、本懐の至也、御産所ハ八畳敷也、宝物には祖先之拝領せるよし、御紋付たる御小柄・御笄ハ慶長六年越前へ御入国のおり、浜松宿にて被下（賜り）しとそ、其外御玩物（等）は外ニ図あり、又天神之社に参詣す、此祠、元ハ御胞衣塚の上に有しを、　公〻の令にて此所へ引移し、其跡に梅木植たりしよし、其木の白梅、源左衛門より差出（奉りしとか）しぬ、これ〻本へかへりて、篠原村より駕にて舞坂駅を経て船場に向ふ、政昭出迎ふ如例、此所今切と云事、人皇百四代後土御門院御宇、明応八年六月湖水決して海となりたる故に今切の名ありとそ、松平信宝（伊豆守、三州吉田城主47）より馳走船いたさる、

これにうち乗りと見れは（て見渡せ）、岸辺に煙を立る所三つあり、故を尋るに、諸侯方（大名）通行之節に荒井駅江の為知（へ知らしめんかため）には左の方に煙を揚る、乗船の為知（へ知らしむる）にハ右の方に煙を立る、荒井より舟をよふには中にて立る、烽火台の趣なり、今江都にて花火と称するものに巧を費すとはちかひて（かはり）、実用といふもの（する）也、上下一統（やかてつ、かなく）無難上陸す大慶（を賀す）也、新居御番所ハ信宝預（か）り也、当駅本陣疋田八郎兵衛に小憩（か方）す、これより馬に乗る（り）早稲川、間もなく塩見坂に及ふ、おりて（下奥し）歩行し、白須賀駅に昼休（の）す、本陣大村庄左衛門也、駕にて立つ、この邑遠三之境也、二川駅小休（に）す、本陣馬場彦十郎也（といふ）、駕にてゆく、向ふ（ひ）に巌屋観音を見る、吉田駅ハ信宝か城下なり、城ハ右の方にあり、こゝの小休本陣中西与右衛門（に休らふ）、駕にて立、百廿間の大橋を渡りてよつやと云所にて日暮て急く（か、るゆへ路を）、稲村良香散に小休（をひさく家（ママ））す、夫より御油駅を過て赤坂駅に泊（宿す）る、本陣伊藤庄左衛門也、浜松より此駅まて、およそ十二里一町に及ふとそ

七日

赤坂駅を六時駕にて立出（ち）つ、山中法蔵寺に小休（ふ）

す、此寺に　大神君御手習の机を始め、色々の（臨書し給ひし折の）
宝物あり、御像もあり、かつ御手習被成し御間も今に存す、（霊）
こゝを歩行して六町ほと廻りにて舞木村なる、広幡（過き）
八幡に詣てぬ、所の者ハ山中の御宮とも申よし、（称せ）
神君名を改給ひ、舞上り八幡と称し給ひし由、今
神君をも配祭すとそ、又御身隠山といふあり、一揆のせつ、（向乱の時）
此穴に隠れ給ひしよりとそ、跡へ戻りて藤川駅に到る、（立かへり）
本陣森川久左衛門に小休しぬ、駕にて立ちて岡崎
宿に到る、本多忠氏（中書48）之城下なり、本陣中根甚左
衛門に午休す、池鯉鮒宿の休に故障ありしゆへ、当宿（の家にて昼の）（にて むへかりしを、さはる事）（こゝに）
にうつす也、駕にてたつ、城下はつれの矢矧の橋をわたる、（せしなり）（の）
日本第一之大橋にて、長さ二百八間に及ふとそ、行程記を
見る、往昔日本武尊の東夷征伐之時、賊を亡し給ハん（案）（に）
ために、此処にて多くの矢を作らせらるによりて、矢矧と云（給ふ）（名）
へりとそ、うとふ坂より歩行して大浜に到る、茶屋中根源（起りし）
六なる者に小休しぬ、こゝを駕にてたちゆく（の家）（方に）（て）（右に八橋道あり、在原業平の）
（古跡あり）池鯉鮒宿（駅）の本陣永田清兵衛に小休す、故ありて
早く立出ぬ、右に池鯉鮒大明神、いまは神主を永見（をいつき祭る、）

主膳といふ、さきに小休所にて目見さす、こは我祖先（か家）（らひ）（せしむ）
浄光公御実母長松院殿御養家の由緒を以て也（なり）
（御実家村田意竹御妹也、村田後森田と改む、近臣伝右衛門家是也）
に到る、三尾之境也、前後茶屋に到る、成田忠次に小休す、（か家にいこふ）
これより駕にてゆく、左に今川義元戦死の処、所謂（あり）
桶狭間也、墓誌今に到て考ふへし、鳴海駅に宿す、本陣
西尾伊右衛門也（初、宮に泊るへく積しか、松大膳49細兵部50の宿と さし合ぬれハ、この所に宿りぬ、七半時前の到着（やとるきあらましなり）（に）（せり））、赤坂ゟ（より）
此駅にいたる、凡十里半六町也とそ

八日

鳴海宿を七半時に駕にて出ぬ、笠寺・山崎（間宿）を経て、宮（立いて）
にかゝる、左は桑名海上也、右江廻りて、右にあつた大明神（の）
宮也、去夏こゝに詣ふてしゆへ、けふハゆき過ぬ、蔵福寺と（あり）（まゐらす）
いへる寺に小休し、駕にて名古屋を経る、亜相君之城下にて、（いさゝかひ）（過）（徳川斉荘）
殊に美壮也、城下はつれ白山堂福満寺に小休しぬ、（の）（ふ）
次に清須也、本陣林惣兵衛に小憩す、右に信長の（か方に）（ふ）
城跡見ゆ、松繁く生たり、むかし右府（天性残暴なるうへ）其臣に礼な
きを以て滅しとそ、君使臣以礼臣事君以忠と聖（ハ）（いへる聖）
語に見へたり、殷監ともいふへきにや、此所ゟ歩行して（たかひたれハなり）（し）（ミ）

稲葉宿尓小休す、本陣原所次右衛門也、駕にて萩原
宿に到る、本陣森条右衛門也、こゝを昼休とす、又駕
にて立ちて、起宿の本陣加藤右衛門七に小休し、歩して
起川に臨む、大川也、源は木曽川とそ、尾州侯より馳
走人出る、政昭出迎ふ事如例、政昭か言にしたかひて
駕にて越す、川二川也、向ふの川には馳走船あり、乗船して
越しぬ、尾濃の境に到る、雨ふり出る、駕上す、また墨
股川に臨む、是も尾州侯の御領内にて馳走船出る、墨俣
宿に到る、本陣沢井彦四郎に小休す、駕にて行、佐渡
川に到りぬ、戸田氏正采女正51)之領内にて馳走船いつる、美々
敷飾られたり、乗船す、水主とも船歌うたふ、大垣に到る、
戸田氏之城下なり、城は右の方にあり、此所の本陣
岡田清三郎に館す着六時二寸廻り、鳴海駅より此処迄
凡十三里廿町に及ふとそ

九日

七半時に駕にて出たちて、垂井駅本陣栗田文吾に
小休す、此宿の内より大鳥井見ゆ、南宮山とて大
社有よし、詣てたくハあれと、供のもの、つかれいかゝと宣清
申にてやミぬ、関か原に到る、本陣相川次郎兵衛に
小休す、此宿より右へ分れて越前街道也、八幡宮
あり、詣てぬ、また　東照神君の御陣場あり、柵
ゆひて内に石垣あり、賊将石田三成と御対陣の所とそ、
爰を拝してゆく、山道にかゝり玉宿に到る、宿小にして
小休する事あたハす、藤川宿の本陣児玉三郎左衛門に
小休す、玉藤川之間両方より石出たる処を以て、濃江
の境とすとそ、駕にて春照駅に到る、本陣木原新左
衛門に昼休しけり、これより駕にて伊吹山の下をゆく、
野村名主之草屋に捨大夫同家也小憩す、又駕にて行、右に
小谷山見ゆ、こゝハ浅井長政備前守之城跡とそ、雨森川
をわたる、近きころまてハ舟渡しなりしか、去年より
橋を架しぬ、今宵は木本駅に宿る七半時二寸廻り着、国本封地の
飛脚立寄、江戸表江下る、
養性尊公へ御きけんうかゝひ、かつ国本静謐なりと
書状にて申上ル、坂口水飴つけ献しぬ、れゐの方へもお
なし、大垣ゟ此駅まて、およそ十二里八丁に及ふとそ

十日

木之本宿を六時にたつ、駕也、右に地蔵堂あり、向ふに志津か嶽見ゆ、こハ太閤(豊臣)と勝家(柴田)との軍に中川瀬兵衛清秀打死の処(せし)とそ(なり)、右に余語(中川修理大夫家也)湖水見ゆ、柳か瀬宿に臨む関所あり(井伊家より預り也)、本陣松居猪平に小休(ひ)し、又椿井坂之(の)茶屋万蔵に小休(ていこひ)し、中河内本陣柳橋朝市に昼休(ての)せり、雲霧深くして四方の山嶺を見(へ)す、終に栃木峠に到る、茶屋深見源右衛門に休(ふ)む、旧例にて供の小人共へ餅を遣(あたふ)す、高間徳彬(文四郎52)迎ひに出たり、呼出して咄(物語)しす、此処、越江之境なり、これ〻予(か)の領内也、此谷に大きなる栃木数多生たり、浄光公植させ給ひしよし、これ〻板取(一本作虎杖)宿に小休(いこふ)す、こゝに浄光公の御風呂手桶あり見たり、それより上下、孫谷・畠中両村、一の瀬・落合両村(丸岡領分)を歴て今庄宿なり、本陣後藤常次郎に宿す(七時)、領民らの奔走に預る也、木本駅より此駅まて、十里半に及ふとそ

十一日

夜の九時に今庄の泊(宿)りを駕にて立(発し)、湯尾峠を越んとするに、御百姓(国民)とも出て、松明をとほして馳走(先駆)す、かゝる薄(余か)徳の身にて、かゝる奔走(供帳)に預るも恥かし、こゝを越へて鯖波宿に小休(ふ)す、石倉猪左衛門也(なり)、今庄よりこゝまて二里なり、それより東大道・新河原を経て脇本宿なり、鯖波〻一里(なりとそ)也、これより一本杉村を過て今宿也(なり)、脇本〻一里、此辺右に日之山見ゆ、けふハ雲かゝれり、行松・四郎丸を経て松森に小休(ふ)す、これ〻馬にて行(一里けハ)、府中也(本多内蔵助副昌53)在所)、今宿より一里也、府中町中、札の辻てふ所に、副昌の次子廉之丞(54)出居る(て拝す)に詞かくる、家ことに見(行装を)に出し人数多也、町端にて駕(乗輿)上す、信露貴川(一本作白鬼女)をわたる、水主成瀬全宗(惣右衛門55)・徒頭青木伊禎(与一右衛門56)・桜井応久(庄九郎57)出迎ふ、夫々詞かくる、上鯖江〻下鯖江、間部氏詮勝の城下也(を過き)、長泉寺を歴て水落に到る、清水捨三郎(か家)に昼休(のらひ)す、これより岡野・鳥羽(左内蔵助屋敷あり)・江尻・三十八社・浅水、このあたり右に文殊山見ゆ、今市・荒井に到り、一里塚にて馬上(に乗る)す、江端・花堂、此辺村民群をなせり、赤坂より入る、城下也(に入る)、大橋をわたり(る)、本町より家中の婦女幼童(児等)多く出たり(て拝す)、桜門にいる、鉄門・下馬門・太鼓門を歴(て)、夫々出迎ふる者あり、本城橋に到る、目付田辺利起(五太夫58)・土屋貫純(十郎左衛門59)出迎ふ、持物頭岩上朝昭(梶太夫60)出居る、瓦

門より玄関に上る、白洲には用人・役人出つ、鏡板の上にハ家老・城代・側用人出たり、案内ハ家老長直(左膳61)也、当番徒頭仮門野貞親(太郎右衛門62)、長床の大番頭ハ酒井敬忠(十之丞63)、番士は一番組なり、其余の諸士詰居る事例の如し、帰城の式事多き中にも、第一荻野元恒(左近64)に幕府江御礼の使事申わたして、帰国之有難きを謝しぬ

五月三日のしのゝめ、かん原のやとりをたちて、御さきへまいる、けふハ空うちくもりて、小さめさへふりけるに、おきつの川・さつた山・あへ川・うつの山なんといへる、さま〳〵のさかしきところをも、つゆよとみなくうちこえて、ひつしのこくはかりに、岡部の御やとりにつきたり、これも御めくみのふかきゆえなりけむとかしこみ、よろこひつゝおもひめくらせハ、いまやわか君はいつれにか、いかゝわたらせ給ふらん、かゝるさかしき処とも、やすらかにこえ給ひてんと、ねきいのり奉るか中にも、かのさつたの山といへるハ、あしかゝの将軍尊氏、おとゝのたゝ義とかたみにほこをましえたるところとなむ、はらからの道もたえし所とおもへハ、むかしこの山のかたへなるいそへにみちありて、親しらす子しらすといへる名をとなへたるとも見ゆれは、おやこの道もたえたりき、いまハみちもかハりて、さつたの坂にうつりたるも、そのとなへあしくとて、とつく人のゆきゝさへやみぬれハ、いもせの道もたえぬといふへし、かゝるいまハしくけハしきところ、世におゝく有へしともおほえす、されやふるき哥に、いハき山、たゝこえきませ、とよみたるハ、この山をなむよミしとあれハ、けふこそ山の名をよひかえて

成昂上

わか君の、千代をそいのる、いはきやま
みちさへやすく、こえきませとて

注

1) 成島筑山（なるしま・ちくざん）、幕府の奥儒者
2) 田安徳川家当主徳川斉匡（なりまさ）、春嶽の実父
3) 田安徳川家士竹中織部
4) 越前国福井藩主松平斉承（なりつぐ、春嶽の先々代）正室浅姫、春嶽の養祖母
5) 奥老女
6) 徳川斉匡側室連以（れい）、春嶽の実母
7) 酒井外記、四〇二五石、当時は江戸詰
8) 中根靱負（栄太郎、雪江）、七〇〇石、当時は江戸表御用人・御勝手掛り
9) 雨森伝左衛門（小十郎）、六〇〇石、当時は江戸詰

10) 水谷織部（壱岐、水月、酔月）、五〇〇石
11) 笹治兵庫（万之丞、権右衛門）、七二五石、当時は御用人打込（月番）
12) 越前国鯖江藩主
13) 幕臣、当時は御側御用取次
14) 天方孫八、五〇〇石、外に一〇〇石御足、当時は江戸詰
15) 渋谷権左衛門（均事）、六〇〇石、当時は江戸詰（火之御番）
16) 雨森儀右衛門（太郎兵衛）、一五〇石、当時は江戸詰
17) 出淵伝之丞（勇次郎）、一五〇石、江戸詰
18) 山形九十九（熊之助）、一〇〇石、当時は表御小姓
19) 播磨国赤穂藩主
20) 三代将軍徳川家光
21) 頭注「勇猛精進ハ仏家勤学の事なり」
22) 頭注「かほ〳〵しハ結構の古語なり」
23) 浅井八百里、二五〇石、当時は格式末之番外御読書御相手御近習
24) 田安徳川家士反町源五左衛門
25) 田安徳川家士森薫次郎
26) 桑山十蔵（彦助、十兵衛）、二〇〇石、当時は江戸詰
27) 伊予国吉田藩主
28) 菅沼平兵衛（源十郎）、一〇〇石、当時は遠慮
29) 小宮山周蔵、一〇〇石、当時は江戸詰
30) 近藤雄蔵（猶次郎、勇蔵、雄蔵、左太夫）、一〇〇石、当時は御小姓頭
31) 栃屋縫之助（栄太郎）、二〇〇石、当時は御小姓
32) 上月久尾（熊之助、久右衛門、湖舟）、一五〇石、当時は奥御小姓
33) 常陸国下妻藩主
34) 相模国小田原藩主
35) 周防国・長門国長州藩主
36) 上坂藤太夫（藤助、小金吾）、一〇〇石、当時は江戸詰
37) 頭注「帖紙即ハなかミの事なり」
38) 松波甚左衛門（弥次郎）、一〇〇石、当時は御書院番組（御近習番）
39) 前波忠兵衛（他之助）、一五〇石、当時は御側向頭取
40) 加賀九郎右衛門（藤七郎、藤左衛門）、二〇〇石、当時は御小姓頭取
41) 駿河国沼津藩主
42) 播磨国姫路藩主
43) 大和国郡山藩主
44) 伊予国松山藩主
45) 駿河国田中藩主
46) 田川清介（弥三郎）、一七人扶持、御書院番組（御右筆）
47) 三河国吉田藩主松平信宝（のぶたか）
48) 三河国岡崎藩主本多忠民（ただもと）
49) 讃岐国高松藩松平（大膳）家当主松平頼覚（よりあき）
50) 肥後国熊本藩主細川斉護か
51) 美濃国大垣藩主戸田氏正
52) 高間文四郎（四郎）、一〇〇石、当時は郡奉行
53) 本多内蔵助（副昌（すけまさ））、二万石
54) 後の本多内蔵助（丹波、富恭（とみやす））、二万石
55) 成瀬惣右衛門、一〇〇石、当時は御水主頭
56) 青木与一右衛門（金八）、一〇〇石、当時は御徒頭
57) 桜井庄九郎（鉄五郎）、一五〇石、当時は御時宜役
58) 田辺五太夫（鉄五郎）、一五〇石、当時は御屋形普請御用掛り
59) 土屋十郎右衛門（小金吾）、三〇〇石、外に御足三〇石、当時は御目付役
60) 岩上梶太夫（音五郎、荒次郎）、二〇〇石、当時は御持弓頭（屋鋪奉行兼）
61) 岡部左膳（長十郎）、一五〇〇石、当時は御家老職（江戸ゟ奉書組頭）
62) 門野太郎右衛門（彦助）、一〇〇石、当時は末之番外御時宜役
63) 酒井十之丞（彦六、頼母）、八二〇石、当時は大御番頭
64) 荻野左近（与三郎）、一〇〇〇石、当時は格式高知席